

鹿児島城趾御楼門復元と

薩摩藩の能文化

中西 喜彦



一、はじめに

鹿児島では来年三月に鹿児島城趾に御楼門が復元完成する。その内側には昔立派な建物があった。例えば御楼門に入り、左側には御馬召（厩）がある。さらに進むと能の楽屋とみられる熊の間、橋掛り、能舞台、東側と南面に庭を望んで、客間として鷺の間と麒麟の間が位置し、能舞台の正面は奥書院でそこから能を見物する仕掛けである（写真1）。

このことは一昨年暮、県立埋蔵文化財センターの発掘現場調査報告があり、発掘場所の

関係で橋掛りだけです確認されました。長さ9・5メートル、幅1・4メートルの本格的なものである。

現在の鹿児島はNHK大河ドラマでも「篤姫」や「西郷どん」で、武の国の印象が強い。しかし、城内では能が盛んに行われ、本舞台と敷舞台があった（写真1）。城下では諏訪神社（南方神社）境内の頭家能舞台（現春日町）、中西家舞台（現東千石町）、柏家舞台（現柳町）および小幡家舞台（現薬師町）が記録されている。しかしながら、御楼門復元事業と関連して能が語られることは殆どない（写真2）。

唯一、鹿児島に現存する能関連施設は県民交流センター一階の県民ホール（能舞台）である。平成15年4月に設立され、現在に至っている。多目的ホールと言う特徴はあるが、能舞台はヒノキ造りで本格的なものである。普段は奥に収納されているが観客席約670

席、車椅子の人まで収容出来るものである。

筆者は全国の能舞台を見る限りにおいて、県民交流センター能舞台の設置場所、その建造物の規模に驚くのである。色々調べてみると、その理由が理解できるようになった。薩摩藩初代藩主家久公から幕末の久光公まで能を限りなく愛好し、外交や個人の思想形成に励まれていた。その忘れ形見がこのような形で残ったのではないかと思うようになった。

この度の御楼門復元完成を迎えて、能舞台をセットにして文武両道の国鹿児島のシンボルに出来ないかと考えます。ところが関係者に能の魅力を説明しようにも「群盲象を撫でる」の伝で、今や能を観たことも聞いた事もない人にどう説明するかに窮します。

そこで、○江戸時代初期から幕末までの薩摩藩主の能への愛好振り、○平成になって入来薪能を7回も主催された本誌生みの親入来

院貞子さんの話、○第30回国民文化祭鹿児島大会「能楽の祭典」の紹介などをしたと思います。

拙文をご覧頂いた諸賢に能の魅力を感じ、薩摩の能文化再考の一助になれば望外の喜びです。

二、能楽とは

能は室町時代に観阿弥・世阿弥親子によって、確立され、現代まで維持愛好されている。既に南北朝時代から將軍や武將によって能楽愛好の風が広がっていた。以来幕末まで約五百年に亘って武家文化の大きな柱の一つとして歩み続けてきた。

天野文雄によると、「武將達が能のどこに惹かれたか」というと、一つは、それが我が国の芸能史上はじめて生まれた演劇だということであろう。能は音楽（謡）と舞踊（所作）が一体となった歌舞劇で、そうした総合的な芸

能はかつてなかった。もう一つは能の詞章が武家文化の中心的位置を占めていた和歌や連歌と同質の詩的文章でつづられていることがあげられるだろう」と述べている。

秀吉の能への最大の貢献として、4座保護策がある。大名負担で観世座995石、宝生座960石、金剛座815石、金春座は豊臣家直轄であり、大夫は500石だったと言う。徳川に政権が移ってから原則的には継承されている。これにより、4座の能役者は生活が安定し芸事に専念出来るようになったという。後で喜多流が加わり5座になるが、秀吉はこれ以外にもあった座を4流派のなかに吸収合併して能楽の式楽としての地位を確立した(岩波講座、第一巻 能・狂言の歴史)。

能楽は、江戸時代初期には、豊臣秀吉や徳川家康の能楽愛好ぶりをみて、各藩主たちは、大名間の外交に果たす能の役割の大きさに気

付いた。幕府に従順さを示すために、文化に熱心な藩としても各藩主は能楽師を雇用して、祝賀行事など接待客への披露や藩士達の教養として稽古に務めた。

三、能を愛好した薩摩藩主たち

薩摩藩における江戸時代初期や最盛期、さらに幕末にかけての歴代藩主の能楽と向き合い方を紹介してみたい。歴史上の人物である薩摩藩主の能楽への向き合いを通じて、能楽の魅力再発見に繋がることを期待するものである。

○初代薩摩藩主家久公(1576~1638)

慶長5年(1600)家督を継ぐとともに、鹿児島城築城(1602)、琉球平定(1609)など薩摩藩のその後の基礎固めを行っている。丁度この頃は関ヶ原合戦後天下統一が徳川家を中心に確立出来るかどうかの緊張した時期である。能楽の導入もこれらの時代の

動きに合わせた一環と考えられる。

慶長7年（1602）秀吉公の能指南役の一人であった坊官下間少進（本願寺の家老役、素人能役者）の弟子である虎屋長門（中西長門守）を能役者として300石で召抱えている。さらに、1620年には千石に加増した。

家久の父義弘は、関ヶ原の合戦で西軍側に廻り、徳川軍の中を強行突破して薩摩まで帰国したことで有名である。その帰国に力を尽くした者への加増が50石と言われている。如何に長門が厚遇されたかを示している。当時外交の中心は皇居のある京都であり、家久は禁中で能を演じていた長門を薩摩外交官として重用するとともに、藩内では能文化の伝道者として活用している。

家久の能への傾倒の様子は色々な手紙や日記等で残っているが、自分の召し抱えた長門に宛てた手紙に、下間少進の著した能の型付

書である「童舞抄」を写して、長門に決して他に漏らさないと感謝の手紙を送っている。

下間少進から秘伝書の相伝を受けたことを意味している。また、若い頃は能「花筐」の小道具である花かごを作って周囲に見せ、軟弱であると父義弘を心配させたと伝えられる。

諏訪神社（南方神社）の大祭に合わせて頭屋能舞台で7月18日に能が奉納されるようになったのも家久の時代からと言われている。前述の行事や長門の家系も明治初期まで時代の波を受けながら継続されている（写真2）。

○8代薩摩藩主重豪公（1745～1833）

重豪公は7代藩主重年の嫡男として延享2年（1745）に生まれ、89歳の長寿を保たれた。開明派大名として周知の殿様である。しかし、能楽との関係では鹿児島在住の人でもほとんど専門家以外は定かでない。重豪の祖父5代藩主継豊は5代將軍綱吉の養女竹姫

を嫁に迎えている。重豪の父重年が早逝したため、重豪は11歳で藩主となり、祖父継豊が後見人となった。江戸の藩邸での生活が多く、祖母竹姫が重豪の養育にあたった。また、この竹姫の遺言で重豪の三女茂姫が將軍家斉の御台所になり幕府との縁が深くなった。

能楽の面から特記することとして、綱吉公の代になって能楽が一時期を画したことである。自分が舞うだけでなく、小姓や大名達に出演を強要するなど、秀吉以上の能気違いだったと言われている。その一面として、綱吉の宝生鬮貞に合わせて、加賀の前田家や尾張徳川家も金春流主体だった自藩の能を宝生流主体に変えたと言われている。薩摩藩も同様である。

重豪公もこのような背景の中で能楽に親しんで居る。宝暦13年(1768)19歳の時宝生九郎友精から翁舞の伝授を受けている。

また、20歳の時、薩摩の稻荷大明神で結願のため法楽能をもよおし、嵐山、田村、羽衣、安宅および弓八幡の5番を独演している。

幕府と縁を強めた重豪は壮年期には將軍岳父として江戸藩邸で演能の会を度々設けている。43歳で隠居すると公式演能記録が途絶えている。しかし、71歳の時高輪邸の祝賀会で自ら綾鼓と井筒の能を演じている。進取の気性に富んだ学問好きの藩主として多面的活動で知られが、能への取り組は、江戸藩邸を舞台に公家や大名間の外交手段として盛んだったことが伺える。

(家久公、重豪公の記録については林和利元鹿児島女子大(現志学館大学)助教授時代の得難い研究報告を参考に纏めました)。

○11代斉彬公(1809~1857)

斉彬公初入部に際して、家督内証祝として、一門四家の家族一同が城内に招かれている。

宮尾登美子氏の小説「篤姫」の描写を借りてその様子を紹介してみたい。『奥書院へ四家一同着座。その後一人ずつ奥小姓の案内で席を能舞台の隣の控えの間に移し、斉彬の個別謁見を受けた。

このあと、四つ時（10時頃）から、「翁三番叟」が始まり、一旦休んで、吸い物と盃、菓子がだされ、斉彬は御簾のうちに入つてのち一同寛いで、「高砂」「田村」「羽衣」「鞍馬天狗」を観覧。

ここで中入りとなり、四家の主のみ元の書院で二汁五菜の饗応がなされて、子供たちは唐子之間で二汁三菜お菓子付の献立であった。その後は再び狂言の「末広がり」「素袍落」を見物、最後にはまたお菓子お茶を頂いて、夕闇の迫る頃、分家一同下城した』とあります。

（宮尾登美子 篤姫より）

○国父久光公（1817～1887）

久光公は斉彬公没後、薩摩藩をまとめて明治維新を成功させた立役者である。実子12代忠義を後見する形で藩政を主導したため国父と呼ばれている。明治10年の西南の役で、鹿児島（鶴丸）城が焼失し、明治12年に斉興の時建てられた玉里邸を改修して入居され、晩年をここで過ごされています。

今回は「島津家黎明館預託文書」の中にある能組と鹿児島大学図書館玉里文庫中の久光公愛用の宝生流謡曲集で曲目ごとに稽古回数が見られているものを資料として調べてみました。

明治17年11月からほぼ一ヶ月間隔で、71歳でお亡くなりになった明治20年12月の四ヶ月前まで、1日で能5番、狂言5番が演じられていました。2年10ヶ月の間に宝生流名寄せの180曲中109曲が演じら

れており、演目では高砂、老松、鉢木、船弁慶、融、阿漕、殺生石など現在でも人気曲が2回上演されていた。

一方、謡曲稽古回数を現在の名寄180曲で見ると、165曲(92%)に印がつけてあった。曲目別稽古回数は1回(40%)2回(36%)、3回(11%)、4回(4・4%)および5回(0・6%)となっており、大変熱心に稽古をされた様子が窺えた。5回のもは鉢木、3〜4回目のもは三番目の鬘物能より、二番目の修羅能や五番目の尾能が多く、未稽古のものに三番目ものの小町ものがあつた。

以上約300年に亘る薩摩の殿様の能への関わりを拾い上げてみた。一番感じることとは愛好された曲目(演じられた)を知るとお人柄に触れたようで、今までと違った親近感を感じることである。

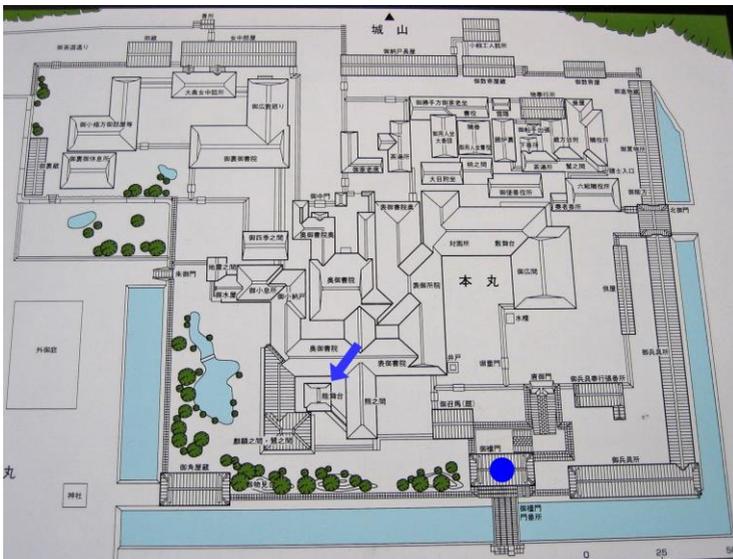


写真1 鹿兒島城再現模型～江戸時代後期 (黎明館)

● 印が御楼門、矢(↓) 印が能舞台

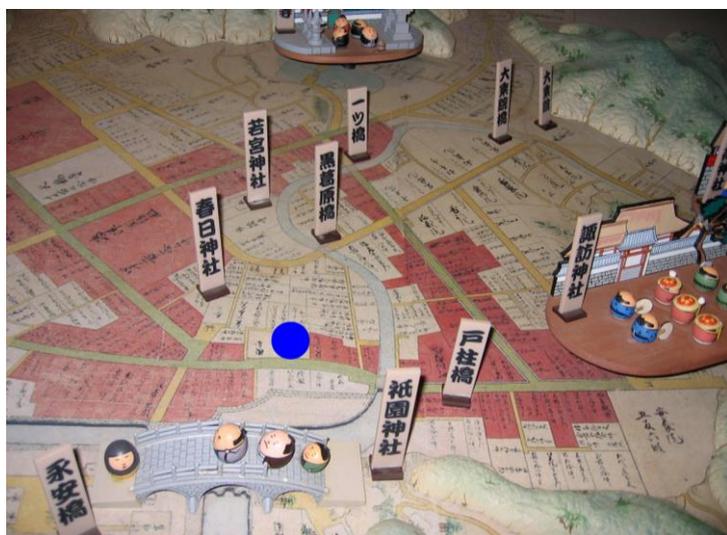


写真2 頭屋能舞台と周辺神社のパノラマ写真」(石橋記念公園)

● 印が頭家能舞台



写真3 家久公が愛した能「花籠 (はながたみ)」
(皇子と照る日の前) の若き日の恋物語

四、入来薪能（清色城趾）のこと

薪能を主催され故入来院貞子さんに原稿を頂いた鹿児島謡曲連合会会報「風姿」5号の第7回入来薪能紹介文から要点を拾って掲示します。

平成10年の渋谷氏下向750年記念イベントの成功に続く町興しを模索したこと。在京中夫婦で習われていた観世流鍊仙会の若松健史先生が長崎の諏訪神社で諏訪を舞われることを聞きこれだと思われたこと。機会を作って先生に清色城趾をお見せし、最高の舞台になると折り紙をつけられたこと。

これからが貞子さんの真骨頂です。そのまま会報の文を再度掲載します。

『実際の作業に当たると土地の者は誰一人能を観たこともない。百聞は一見にしかずと、岡山の上稲荷で薪能をなさる先生の舞台を観ることにした。』

ワゴン車に町の企画課長と職員、大工さん、照明音響担当者と私と花水木会会計の6人で早朝出発。一泊の見学を強行した。そして、舞台や照明に必要な知識を得て第一歩を踏み出せたのだった。

第一回は「天鼓」、二回目には「巴」を用意して雨のため中止。それから「清経」「鳥追」「屋島」「忠度」と基本的には毎年続けて来た。しかし、赤字を個人的に補うことに限界が来ていたことと、私が発がんしたため5年間の空白になってしまった。今回再開出来たことは本当に幸せなことだと思う。

ご来場の方々は異口同音に「素晴らしい」「感激した」と言われる。実際、ご覧になれば、日本の伝統芸能の持つ芸術性に打たれるのだ。そして私はその意義を噛みしめる。ただ赤字は入場者数に反比例するので、今年も結構な額を背負う羽目になってしまった。



写真4 清色城址仮設能舞台の前で開会挨拶をされる故入院貞子さん
(平成21年8月28日)

この入来薪能が赤字に悩まされることなく大らかに企画出来るような仕組みが出来ないものだろうか。この地の行事として、より多くの方々になることを切望している（風姿5号より抜粋）。

演目は殆ど修羅物で中世の武士の世界を紹介されたかったのではないかと思います。さらに、貞子さんの発想の豊かさは「鳥追舟」はJR川内駅近くの鳥追の森付近を物語の舞台とされていることから駅前広場に鳥追舟の親子像を設置されたことである。

五、第30回国民文化祭鹿児島大会

「能楽の祭典」について

平成27年11月4日(水)、5日(木)にわたってかごしま県民交流センター県民ホール(能舞台)で開催されました。

初日は模範演技として、宝生、金春両宗家の演能、観世の仕舞、茂山家の狂言が演じら

れました。

森博幸市長の挨拶後、金春流素謡「翁」、金春流能「枕慈童」、宝生流能「舟弁慶」、観世流仕舞「忠度」、大蔵流狂言「太刀奪」が演じられました。

二日目の能愛好者交流会では5流派に所属する方が、北海道、仙台、東京、大阪、九州一円から25団体ご参加頂き、午前9時30分から午後6時30分まで熱演されました。

両日とも晴天に恵まれ、会場は両日とも満員の盛況でした。

会場内のロビーでは「鹿児島能楽の歴史散歩」能楽を愛好した藩主たち」のパネル展示、能楽5流派の舞扇展示および各種の能面展示や面打実演などが披露されました。

調査統計では出演者数441人、来場者1426人でした。

筆者は「能楽の祭典」企画委員長として参



写真5 第30回国民文化祭鹿児島大会「能楽の祭典」
素謡「鶴亀」 宝生流教授囑託会参加者全員

加しましたが県、市など行政の絶大なるご配慮は勿論ですが、鹿児島謡曲連合会会員の皆さんの温かい協力をえました。また、流友の方では宝生流教授嘱託会九州支部長の肝いりで素謡「鶴亀」を無本で謡うことになりました。写真で見られるように約50人が舞台の上に出ています。シテ役が本部の理事長、ワキ役が地元の小生、残り地謡という設定でした。楽屋で人の居ない合間をみてシテと二人で間違えないよう申合せで謡ったのを思い出します。

六、「二所懸命」から生まれた能の世界

一般に能の魅力として、行かずして名所旧跡を知る。知らずして高貴と交わるなど色々魅力が挙げられている。しかし、能が武家文化の代表と言われる所以はもう少し深いところにあるように思われる。司馬遼太郎氏は「この国のかたち」の中で我が国は律令制か

ら封建社会、すなわち武家の社会になって、鎌倉時代は武士とよばれる開拓農民が父親の開拓した田地を一所として懸命に確保した。それが室町時代に続き、土地生産力の向上と貨幣経済の発達により能・狂言・茶道・華道、数寄屋造りなどが発達し日本文化の基礎になったと述べている。

和文の発達につれ、万葉集、古今和歌集、源氏物語、伊勢物語、太平記などが作られ、それを元に色々な物語が脚本された。当初は観るだけだったのが、武士も謡い舞うようになった。秀吉などは自分の忠孝、武勇、幽玄、奇瑞などを新作能として作らせ、自分で演じたという。

哲学者梅原猛氏は東北大地震を人災と断じ、「天台本覚思想」である「草木国土悉皆成仏」を「人類哲学へ」と提案しておられる。そしてその思想は能の中に最も多く含まれている

という。「我」の世界、自然を奴隷のごとくに扱う現代世界に疑問をのべている。

○演能曲目を通じて見えてくるもの

前述の故入来院貞子さんは町興しの一事業として、鎌倉時代から幕末まで殆ど現地に居住した入来院家の領地だった入来院で、武家社会の一面を能で表現しようとされたのでしよう。川内が舞台の鳥追舟は土地訴訟問題、勝戦、敗戦、夫婦での戦、武人の嗜み、戦で自殺した夫への妻の恨みなど。殆ど武家社会の話です。

一方、薩摩の殿様の演能状態はどうでしょうか。家久公は朝鮮の役での勇猛な戦い振り、伊集院忠棟惨殺事件など近寄り難い殿様との感じを持ちます。それが若いころ写真のような継体天皇と女御の若き日の恋物語を演じるのですから観る人の印象は普段と違ったでしょう。家康にも可愛がられたとの記録がある

ようです(写真3)。

時代が綱吉公、吉宗公の時代になり、薩摩では継豊公、重年公、重豪公と続きます。重豪公はご母堂早逝のため、実際は綱吉公の養女で祖母にあたる竹姫に江戸屋敷で育てられます。父親の重年公も早逝され、重豪公は11歳で祖父継豊の後見のもと藩主となります。竹姫は公家の出で、叔母が綱吉公の側室であったため大奥勤めでしたが、会津藩主松平正容の嫡子正邦と婚約します。しかし、その直後相手は病死します。その後綱吉公も没し、幾つかの縁談後、今度は吉宗公の養女として、継豊公への縁談になります。婚礼には芝薩摩藩邸横に7千坪の敷地を無償で与えられたとあります(松尾千歳氏論文より)。

前述のように綱吉公は秀吉公以来の能気遣いと言われ、現在のように能を素謡、仕舞、舞囃子のように演技法を工夫し、なるべく多

くの人が楽しめるようにしました。重豪はいわば竹姫の縁で徳川一家みたいなもので、前述の若い時代の能への傾倒ぶりが理解出来ません。

晩年71歳時、高輪藩邸で演能の綾鼓は、庭番の老人の女御に対する恋物語。井筒は昔一緒に暮らした女が業平の衣装をつけ井筒（井戸）の水鏡に映る姿に見込む姿に。招待客は大変感動したのではないでしょうか。

斉彬公の場合は初入部の際一門四家集まつての祝宴に能の披露が行われ、斉彬公自身は余り能に関する記録はない。

一方、久光公については資料としては謡曲集と能番組だけである。この分析は筆者が初めてだと思うが、前述のように168曲中5回も印がついているのは鉢木だけであり、演能でも2回もご覧になっている。これは北条時頼と常世という武家社会で主従を結びつけ

る「忠義と奉公」の物語である。

久光公についてまとめられた芳即正氏は明治維新としようとすぐ西郷と大久保の名前が挙がる。しかし、薩摩藩が久光公を中心に挙藩統一行動をとった点が、幕末史上の特徴であり、倒幕戦での勝利を導く重要なポイントになったと述べて居られる。その後の「生麦事件から実質上の薩英戦争の勝利、反転英国との友好外交に繋がっている。このぶれない自信は筆者の推測でしかないが、能の世界を熟知されたことによる世界観からと思うのである。

以上のように時代ごとの代表的藩主のお好きな能の曲目やその活用の仕方を見てみた。江戸時代初期から幕末にかけて薩摩藩でも外交や自己研鑽の道具として活用されたことが伺える。

七、おわりに

能の良さを多々述べた。まずはご覧くださ
いと能舞台にご案内したいところである。し
かし、能一番演じるにはシテ、ワキ、地謡、
後見人、囃子方(笛、小鼓、大鼓、太鼓)、狂
言方、舞台下働きとざっと見積もっても22
名ぐらいの人数が必要である。しかも、それ
ぞれ専門として分かれていて、1年前から予
約しないと日時が揃えられない。能楽師の方
は公演での収入だけでは生活が出来ないので、
素人の弟子をとりその月謝で生計を立ててお
られる。能の公演、素人のお弟子さんともに
東京、大阪、福岡のような大都市に集中して
しまいます。

そこで、地方で能公演を計画すると、前述
の故入来院貞子さんの「ほやき」が出てきま
す。今でもその努力を思うと胸が熱くなりま
す。

○鹿児島に縁のある能の曲名としては「俊
寛」と「鳥追舟」があります。俊寛は平安時
代平清盛の怒りをかい薩摩の「鬼界島(三島
村硫黄島)」に流刑(1177)になった話で
す。天文館中町アーケードの一角に碑が立っ
ています。明治末期までは俊寛堀と言って船
着場があり。ここから船出したと言われてい
ます。

筆者らは来年3月の御楼門復元を祝って、
祝賀能として、季節の良い10月31日(土)
午後、県民交流センター能舞台で、能「俊寛」
を公演の予定です。宝生流最高の演者の方々
に来鹿頂こうと計画しています。これが当初
の提案の一の矢になることを願っております。
月並みですがご理解とご協力をお願い申し
上げます。

(鹿児島県文化協会理事、鹿児島謡曲連合会
会長、鹿児島大学名誉教授)